

Current Status and Future Directions for Evaluating the International Exchange Program at Fukuoka University School of Nursing – Second Report: Exchange with Washburn University School of Nursing –

Kumi ARITA^{1),2)}, Tomoko OSHIRO^{1),2)}, Yoko ISHIBASHI^{1),2)},
Yasuko TASHIMA^{1),2)}, Ikuko MIYABAYASHI^{1),2)}, Motomu KUROKI^{1),2)}

¹⁾ *Committee of International Affairs 2013, School of Nursing, Faculty of Medicine, Fukuoka University*

²⁾ *School of Nursing, Faculty of Medicine, Fukuoka University*

Abstract

As one of the international activities promoted by our nursing school, we initiated an exchange program with the nursing school of Washburn University, Kansas, USA in 2012. Washburn University is the first university to enter into an academic exchange agreement with Fukuoka University. We sent a total of 20 nursing students and four faculty members in 2012 and 2013. The participants positively completed the program, which includes English and nursing classes and clinical practice in the hospital with visits to health care facilities and homestay facilities, and were quite satisfied with the content of the program. This program has greatly widened the views of the students and faculty, increasing their motivation to learn and teach, which has positively affected their future careers. In 2014, we invited the dean of the nursing school at Washburn University to Fukuoka University to discuss the development of an additional program implemented at Fukuoka for both the students and faculty of Washburn University. There are several problems to be addressed, including selecting the facilities for training, improving linguistic abilities and acquiring fundamental knowledge regarding medical care and nursing in the two countries. With the goal of overcoming these problems, we wish to continue improving and expanding the current program for internationalizing our nursing school.

Key words: International Educational Exchange, Students, Faculty, Nursing, United States of America

看護学科における国際交流活動の現状と課題 – 第2報 米国ウオッシュュバン大学看護学部との国際交流 –

有田 久美^{1),2)} 大城 知子^{1),2)} 石橋 曜子^{1),2)}
田島 康子^{1),2)} 宮林 郁子^{1),2)} 黒木 求^{1),2)}

¹⁾ 福岡大学医学部看護学科 平成 25 年度国際交流委員

²⁾ 福岡大学医学部看護学科

要旨: 当看護学科の国際交流活動のひとつとして、福岡大学最初の海外協定校である米国カンザス州ウオッシュュバン大学の看護学部と、2012年に国際交流プログラムを始め、2年間に計20名の看護学生と4名の教員を派遣した。学生達は英語クラス、看護クラス、病院実習、ケア施設見学、ホームステイなどのプログラムに積極的に関わった。参加者の研修内容への満足度は非常に高く、視野は拡大し、学習や教育のモチベーションが高まり、将来のキャリア形成にも好影響を与えたと考えられた。2014年にはウオッシュュバン大学看護学部長を福岡に招き、ウオッシュュバン大学の看護学生・教員との交流を福岡で行うことを話し合った。

今後このプログラムをより充実させるためには、研修先の選定や事前の語学力の向上、両国の医療・看護に関する基礎的知識の習得等、改善すべき課題も多くあるが、今後そうした課題を解決していきながらプログラム内容を充実させることを進めていきたい。

キーワード：国際交流、米国、看護学生、看護教員、看護学科

はじめに

文部科学省は、国際的な産業競争力の向上や国と国の絆を強化する基盤として、グローバルな舞台に積極的に挑戦し活躍できる人材の育成を図るためにグローバル人材推進事業を推進している¹⁾。福岡大学においても、2013年に全学部の学生を対象として、グローバル人材の育成を目的とした教育プログラム、「グローバルアクティブプログラム（以下GAPとする.）」を9か年計画でスタートさせた²⁾。福岡大学が目指すグローバル人材とは、高いコミュニケーション能力に加えて、未知の世界や異なる国籍・文化を持つ人に対して堂々と飛び込んで行くアクティブな精神力を持った人を指している。グローバル化は医療や看護分野においても急速に進行しており、グローバル人材の育成は急務である。

福岡大学医学部看護学科においても、学生の国際的視野を養うために「専門職として、幅広い社会的活動及び国際的な医療活動ができる能力の育成」を教育目標の一つとして掲げている。国際交流委員会では、2007年の開設時より、韓国の啓明大学看護学部と国際交流協定を締結し相互交流を深め、その成果については「看護学科における国際交流活動の現状と課題－韓国啓明大学看護学部との国際交流－」で報告した³⁾。さらに、海外交流国の拡大のために2番目の交流先を、高い看護の専門性をもつ米国とし、福岡大学最初の海外協定校である、カンザス州ウオッシュバン大学の看護学部と2012年に新たに国際交流プログラムを始めた。

ここでは国際交流委員の立場から、過去2年間に実施されたプログラムを中心とした交流の経過を振り返り、今後の国際交流のあり方について提案する。

なお、この研修に関わる学生のアンケート結果の使用については、誓約書提出時に口頭と書面でその趣旨を説明し、書面での同意を行い、その提出をもって同意とした。

内容・成果

1. ウオッシュバン大学との国際交流開始までの経過

ウオッシュバン大学と福岡大学は、1984年から海外研修を開始した。福岡大学として最初の海外協定校であり、国際センターが企画する全学部の学生を対象とした

海外研修を、毎年約1か月間実施している。費用は往復渡航費のみ助成され、研修費、生活費は自費である。看護学科の学生も参加可能であり、今まで毎年1名程度参加してきた。

しかし、プログラムは英語学習が主な目的であり、当学科が目指す専門職としての学びを深める機会がなかった。ウオッシュバン大学は看護学部を有しており、これまでの福岡大学との交友を礎として、研修を進めるにあたってスムーズに手続きが進むと考えた。そこで福岡大学国際センターより紹介を受け、研修内容の具体化へ向けて、ウオッシュバン大学国際センターの事務とコンタクトを開始した。看護学科との折衝もすべてウオッシュバン大学の国際センターを通して行った。時期は、日本の春期休暇期間である2月末から2週間程度とし、研修受け入れ人数は、学生10名程度、教職員2名程度との要望であった。研修時の費用については、看護学科独自のプログラムであり、福岡大学からの助成はなかったため、渡航費、研修費、宿泊費（大学の寄宿舎利用）等は全て自費となった。同時期に行われる国際センター企画のウオッシュバンの研修より10万円ほど割高となった。教員に関しては1名のみ出張が認められた。2012年に国際交流プログラムを開始し、この2年間に計20名の看護学生と4名の教員を派遣した。また、本研修に関して2013年度からは、福岡大学GAP科目「留学I（3か月未満）」2単位が申請により承認された。

2. ウオッシュバン大学看護学部の概要

ウオッシュバン大学は、米国のほぼ中央カンザス州の州都トピカに1874年に創設された公立大学である。約7000人の学生が在籍し200のアカデミックプログラムを有している。看護学部は1974年に開設され、今年度が40周年を迎えた。これまで3000人の看護学士が卒業し、学士課程のほかに修士、博士課程もある。

3. 2013年度研修の実際

1) 研修目的：

- (1) 高い専門性と身体アセスメント能力を特徴とする米国の先進的な看護を学ぶことにより、自己の看護観を育成する。
- (2) 異なる文化や社会背景を持つ米国の看護を学ぶことや、そこで生活する人々と交流することにより、

グローバルな感覚と視野を育成する。

2) 研修期間：

2014年2月28日～3月15日(16日間)

※引率教員 2014年2月28日～3月9日(9日間)

3) 研修参加者：

看護学科学学生合計10名(2年次生8名, 3年次生1名, 4年次生1名)

引率教員2名

4) 研修学生の選抜：

10月より募集を行い、国際交流委員会での書類審査、面接により候補者を決定し、教授会での承認を受けて12月に決定した。応募資格は、初年度は全学年としていたが、実習経験のあるほうが学習効果が高いとの反省から2回目は2年生以上を対象とした。書類審査時は志望動機などを重視し、語学能力は参考程度とした。

5) 事前オリエンテーションおよび学習会：

決定後は、オリエンテーションの参加を義務とし、3回に分けて米国の社会と文化などの学習会を行い研修へ参加した。また、英会話の訓練の一環として、ボランティアで米国人に参加してもらい挨拶などの演習を行った。さらに、本研修では、病院研修を行うために事前に「Cardio Pulmonary Resuscitation(以下CPR)ライセンス取得」を義務付けられている。オリエンテーションを行う際に、「CPRライセンス取得」についてもガイダンスを行い、昨年研修に参加した学生がボランティアで指導のもと実技練習を実施した。オンラインで「BLS for Healthcare Providers Online Part 1」を受験し、筆記試験合格の証明書を持って渡米した。

6) 研修プログラム

2013年度の研修では、前年度課題になった病院・施設見学の充実やウオッシュバン大学看護学部学生との交流を持つ機会なども考慮されたものであった。以下に研修プログラム表1の内容別に成果を述べる。

(1) オリエンテーション・キャンパスツアー

到着が週末であったため、休日の間に大学周辺の観光や日用品の買い物を行い、2週間の研修を開始する生活の準備を整えることができた。国際交流センターの職員や研修場所の雰囲気に対し慣れたところで、オリエンテーションが開始された。

オリエンテーションで使用される英語は、わかりやすい表現だったため、学生も内容を理解で

き、最終的な確認をするだけで通訳は必要なかった。出発前は英語力には不安を抱いていた学生が多かったが、思っていたよりも英語が理解できることが、学生たちの自信や環境への適応を高める結果になった。オリエンテーション後に約1時間半をかけてキャンパス内の散策を行った。広大な敷地の中に点在する施設は、各学部に応じて特徴があり、学生たちが生き生きと学んでいる姿を見ることができた。この時、各学部や施設の大まかな位置関係を把握できたので、その後の授業や研修時の移動がスムーズにできた。

(2) 語学研修

同時期に千葉商科大学から12名の学生が研修に来たため、一部のプログラムは一緒に行われた。看護学科の学生は、研修期間中3コマの英語の授業を受けた。学生からは、他のプログラムが充実していたので、時間的には3コマで充分であり、なくても良いという意見もあった。生きた英語を学んだ結果であると考えられる。これは、福岡大学の教養科目において外国人講師による小グループでの授業を受けていることや、もともと国際に関心の高い学生であったことが影響していると考えられる。

(3) 看護学部での講義

受講した講義は、Pathology, Professional Transformation, Nursing Fundamentals, Physical Assessment, Pharmacology Lab, Overview of US Healthcareなどで、内容のわからないものについて一部質問を行った。この中で、Pathologyについては前日に講義資料を入手し、わからない単語は調べるなどの予習をしていたものの、説明を英語で理解するのはかなり難易度が高かった。これに対して、Nursing Fundamentalsでは看護過程で、学生は福岡大学の講義でもすでに看護診断を学んでいたために理解が早かった。学生たちは、米国の看護学生も看護師になるために自分たちと同様の講義を受けていることを身をもって体験し、「看護」が世界に共通することを感じていた。また、休憩時間には一緒に講義を受けたウオッシュバン大学の学生に積極的に話しかけ、コミュニケーションをとっていた。同じ目標に向かって学習をしている者同士、お互いに親近感を感じながら接している様子を感じられた。

(4) 施設見学

病院をはじめ、長期療養型施設、精神科クリニックなど複数の施設の見学を行った。いずれの病院・施設にもウオッシュバン大学看護学部の教員が同伴し、各施設のスタッフと一緒に研修のコーディネートがされていた。① St. Francis Hospital, ②

表 1. 2013 年度 研修プログラム

	月日	曜	午前	午後	夜	宿泊
1	2014年 2/28	金	福岡空港集合(6:20)・福岡空港発(7:20)・成田空港発(12:00)・ダラス空港発(10:40)・カンサスシティ空港着(12:10) ※成田ダラス間所要時間11:20 大学お迎えでトピカへ		歓迎夕食会*	寮
2	3/1	土	オリエンテーション	ショッピングモール見学		寮
3	3/2	日	カンザスシティ見学	カンザスシティ見学		寮
4	3/3	月	英語クラス	英語クラス	夕食会*	寮
			ヘルスチェック	キャンパスツアー	バスケット観戦	
5	3/4	火	CPR実習・テスト	学長レセプション	夕食会*	寮
6	3/5	水	薬理学授業	プレゼン(日本の看護)		寮
				救世軍見学		
7	3/6	木	セントフランシス病院見学	セントフランシス病院見学	映画鑑賞	寮
8	3/7	金	老人ホーム見学	博物館・知事公邸見学	ホームステイ	ホームステイ
9	3/8	土	ホームステイ(※教員は早朝帰国)		ホームステイ	ホームステイ
10	3/9	日	ホームステイ			寮
11	3/10	月	英語クラス	家族センター・精神科クリニック 見学	夕食会*	寮
12	3/11	火	トピカ文化・福祉見学	薬理学演習	アイスホッケー 観戦	寮
13	3/12	水	小規模病院見学	小規模病院見学	夕食会	寮
14	3/13	木	アメリカのヘルスケア(授業)	帰国準備	歓送夕食会*	寮
15	3/14	金	大学の案内で空港へ カンサスシティ空港発(10:35)・ダラス空港発(12:15)・成田 空港着(16:15)※ダラス成田間所要時間13:30			機内
16	3/15	土	成田発(19:30)福岡空港着(21:40) ※到着後解散式(アンケート回収)		福岡着	
※	3/17	月	研修のまとめ・報告会(事前に簡単にまとめておく) 13:00~2時間程度の予定 小講義室2			

福大看護のみ

*招待、負担なし

他は千葉商大と合同(千葉商大は16日帰国)

Brewster Place Long Term Care Facility (高齢者施設), ③ Valeo Mental Health (学生のみ見学), ④ Geary Community Hospital (学生のみ見学) であり, 特に, St. Francis Hospital では, 6つの病棟で中堅の看護師1人に対し, 1名から2名の学生と教員が付き, 午前中シャドウイングを行った。研修は2年生が多数を占め, 実習を終了していないものが多かったために, シャドウイングで見たことを理解できるか心配していたが, 上級生や教員もペアになっていたために, 「全く理解できなかった」という意見はなかった。シャドウイングでは, 早朝の申し送りから, アセスメント, 服薬管理, バイタルサインの測定など実践を見学し日本との共通性や相違を感じとる場であった。午後からは, 救急部やリハビリテーション部などを見学した。

Brewster Place Long Term Care Facility (高齢者施設) では, 高齢者ケアの場を見学することができた。敷地内の家を購入し独立して生活を行い, 必要なところだけ支援を受ける人, アパートの1室で生活をし, 介護度が極めて高い人などの様子を見学し, 米国での高齢者医療サービスの現状を見ることができた。

引率教員が先に帰国後は, Valeo Mental Health と Geary Community Hospital は学生のみでの見学になった。国際センターの配慮でウオッシュバン大学に留学している日本人に通訳を依頼でき, 必要時は支援してもらい内容を理解することができた。

(5) CPR ライセンス取得

研修2日目の午前中の授業で, ウオッシュバン大学看護学部卒業で St. Francis Hospital 救急部で NP として働いている看護師から実技試験を受けた。学生は事前によく練習していたので, 本番も落ち着いて実技を行うことができた。この試験には学生全員が合格し, 「American Heart Association Healthcare Providers」を取得することができた。

(6) レセプション・イベント

国際センターでは, International Students がウオッシュバン大学やトピカ市・カンザス州, 米国について理解を深め, ウオッシュバン大学学生との友好関係が築けるように様々なレセプションやイベントを準備されていた。学長レセプションは研修2日目の夕方に開催され, 福岡大学から別プログラムでウオッシュバン大学研修に来ている他学部の学生や千葉商科大学の学生も一緒にレセプションに招待された。学生は, 学長と会話をし

たり, 写真に写ったりと有意義な時間を過ごしていた。

その他にも, MIAA バスケットボール観戦, Topeka Road Runner's Hockey Match, オーケストラ・吹奏楽コンサートなどの催しに参加したり, International Students Club や Christian Challenge の学生と夕食会を持ったり, Historical Museum and Governor's Mansion, City Cultural Tour, トピカ議会などの観光があった。学外への移動は, 国際センター職員がレンタカーを借りて運転するなど, 大変行き届いた配慮であった。

(7) 教員・学生のプレゼンテーション

今年度からの試みとして, 福岡大学看護学科教員と学生のプレゼンテーションが提案された。そこで, 教員は「Fukuoka City and Fukuoka University School of Nursing」, 学生は「福岡大学看護学科学生の1日」というテーマでプレゼンテーションを行った。看護学部の学生が約10名と教員が約5名参加した。ランチタイムの短い時間であったが, プレゼンテーションの間には日本から準備していた菓子を渡し会話も弾んだ。

(8) ホームステイ

研修1週目の週末に2泊のホームステイが企画され, 国際センターに登録のあるホストファミリーの協力のもと, 8家族に10人の学生が週末を過ごした。多くの学生は, ホームステイは初めての体験であり, 期待とともに不安もあった。しかし, ほとんどの学生が研修の中で一番楽しかったのはホームステイであると答えた。

ホームステイは, その土地で生活する人々の生活や文化を直接体験することができる。迎えに来てもらう前までは見知らぬ人であった他人が, たった数日で家族のような親近感を感じることができた経験は, それまでの自分自身の価値観を変えることもある。学生の中には, 「これからもホストファミリーとは連絡を取り合いたい」「すばらしい経験をした」と感想を伝えていた。

(9) 日常生活について

学生は, ウオッシュバン大学にある二つの寮に, 教員はインターナショナルハウスの2階の部屋に宿泊した。学生は, ルームメイトやスイートメイト, 他の学生との交流を体験することができ, これが英語力の実践をを高めることにつながった。

また, カフェテリアやコインランドリーなどの設備もあり, キッチンを使用して自炊も可能だったので, 生活面で特に困ったことはなかった。ほとんどのことがウオッシュバン大学の構内でできてしまうために, 学外に出ることが研修施設への

表 2. 参加学生 10 名のアンケート結果 (一部抜粋)

質問項目	とても満足	満足	あまり満足しなかった	満足しなかった
満足度	6 人	4 人	0 人	0 人
意見・感想	<p>良かった点</p> <ul style="list-style-type: none"> ・すごく忙しかったけど、充実していて楽しかった。 ・たくさんの貴重な経験ができた。自分の視野が広がった。 ・日本とアメリカの医療や看護、文化の違いを学ぶことができた。 ・語学研修とは違い、施設や病院の看護師や看護学科の教員、看護学科の学生と直に話せる機会があることが魅力だった。 ・病院だけでなく、いろんなミュージアムに行っていて楽しかった。 ・通訳がいてくれて分かりやすかった。(医療系の通訳は必須であると思う。) ・English クラスは、簡単すぎた。2~3 回程度でちょうど良かった。 ・看護系のクラスは英語の内容が難しいものが多かった。 ・ヘルスアセスメント (フィジカルアセスメント) と米国のヘルスケアについての授業がおもしろかった。 ・寮での生活は様々な国の人とコミュニケーションを取ることができた。 ・寮での生活が楽しかった。英語を使ういい場所でもあった。 ・英語を完璧に話すというより、伝えようとする大切さを学んだ。 ・ホームステイで親切にしてくださって本当に楽しかったです。 ・ホームステイではいろんなところに連れて行ってもらった。 ・ホームステイがとてもよかった。2 泊では少なく感じた。 			
	<p>改善してほしい点</p> <ul style="list-style-type: none"> ・もう少し自由時間が欲しかった。 ・1 日のスケジュールの合間が忙しくて、少し休み時間が欲しかった。 ・訪問先がどのような所なのか調べておけばもっと良かったと思う。 ・博物館の見学がたくさんあったが、宗教に関する歴史を知らなかったためよくわからなかった。 ・看護実技 (演習) の授業も見たい。 ・看護の講義は英語力がなくてはいけなくていい内容だった。 ・どんな看護がしたいと思っているかなど看護学生との交流会が良かった。 ・ルームメイトやスイートメイトたちと過ごす時間がもっと欲しかった。 ・自分が積極的に話していなかったから話す機会が少なかった。 ・今回、すべての場所にバスで連れて行って頂いたが、自分たちの力で公共交通機関を使い、出かける機会も欲しかった。 ・自己の事前学習でもう少しリスニングの力を鍛えておけばよかった。 ・専門用語も少し理解しておいた方がよい。 ・質問をもっと準備する。 ・もっと自由時間があれば仲良くなれた友達とどこかに連れて行ってもらえて、もっと経験ができたかなって思う。 ・全体を通してコミュニケーションがとれていても、知らない単語が多く、ところどころ躓くことがあった。 			

移動のときだけであった。このため、学生だけで学外を散策する時間を考慮してもよかった。

7) 研修学生の感想

表2に参加学生(10名)のアンケート結果を示した。研修の満足度は、10名すべてが、とても満足、満足と答えた。

研修後の学生の感想として、「忙しかったが、充実していて楽しかった。」、「たくさんの貴重な経験ができた。自分の視野が広がった。」、「日本とアメリカの医療や看護、文化の違いを学ぶことができた。」、「語学研修とは違い、施設や病院の看護師や看護学科の教員、看護学科の学生と直に話せる機会があることが魅力だった。」、「寮での生活は様々な国の人とコミュニケーションを取ることができた。」、「英語を完璧に話すというより、伝えようとする大切さを学んだ。」、「費用は高いと思ったが、実際に行って体験すると、お金に変えられない価値があると感じた。」など学生の研修を通しての学びは多く、満足度は高かった。特にホームステイは、米国の社会、文化に直接触れることができ、「一番楽しかった。」など思い出深い経験であった。また、実際に研修することで自分たちの知識や学習不足を感じ「訪問先がどのような所なのか調べておけば良かった。」、「専門用語を理解しておいたほうがよい」、「もっとリスニングの力を鍛えておけばよかった」など学習不足を感じていたがそれがこれからへの学習へのモチベーションの向上へつながる内容であった。しかし、「もう少し自由時間が欲しかった。」、「1日のスケジュールの合間が忙しくて、少し休む時間が欲しかった。」などややハードスケジュールを感じている学生もいた。

課 題 ・ 展 望

初年度の2012年度に研修を受けた学生は、帰国後に福岡大学学生チャレンジプロジェクトに応募し活動するなど、積極的な行動を起こすことにつながった。また、米国の大学院への進学も視野にいれ、就職先を決定する者もいるなど、キャリア形成やモチベーションの向上につながっている。

2013年度のプログラムについては、昨年度の研修後に出た要望を伝え、①複数の施設見学の実施、②研修期間を少し延長し単位を認定する、③看護学科学生との交流の場を持つ、といういずれの課題も改善されたものになっていた。学生自身も研修内容への満足度はかなり高く、全員が参加してよかったと評価していた。しかし、スケジュールが詰まっている場合に、時差ほけなどにより体調を壊す者がいたため、夕方からの予定を調整する

必要がある。

以下、今後の課題として、3点について述べる。

1. 研修前の語学力や看護等に関する基礎的知識の習得

事前学習の必要性については、学生自身も研修前はあまり理解していなかったために、教員との温度差があった。しかし、研修中に「この話は事前にもっと調べておくべきだった」と感じる事が度々あったことが、研修後の学生の反省につながっていた。そのように考えることができたことも、良い経験であった。しかし、事前の知識習得はある程度必要であり、どのような研修や経験を行うのかオリエンテーションで具体的に提示しイメージができるように関わっていききたい。また、英語力に関して個人差はあったが、日常会話に困ったという発言はなく、生きたコミュニケーションができた結果であると考える。ただし、専門用語について知らない看護学の講義や病院でのシャドウイングで理解が半減するため、関係する単語が学べるように、事前の講義や研修先の情報収集に努める必要がある。

2. ウオッシュバン大学看護学部の学生、教員の研修受け入れによる相互交流の開始

2014年9月にウオッシュバン大学看護学部長を福岡に招き、ウオッシュバン大学の看護学生・教員との交流を福岡で行うことを話し合った。今後具体的なプログラムについては検討を重ねていく予定である。日本の看護や保健医療システムをどのように発信していくかの役割もあると考える。おもてなしの意味も込めて相互交流を企画していきたい。

3. 米国看護研修に対する補助金(奨学金)の確保

福岡大学の他の研修プログラムに比べ、当研修に対する学生への助成がないため、研修に行きたいが高額のため断念する学生もいる。人材育成のために海外へ関心のある学生を支えていきたいという思いから、補助金(奨学金)確保への努力を行っている。2014年度は、日本学生支援機構海外留学支援制度と福岡県「世界に打って出る若者育成事業」の2つに応募したが、両者とも不採択であった。続けて、あきらめずに補助金獲得に努めたい。

お わ り に

韓国啓明大学との間で始まった看護学科の国際交流は、この6年間の徐々に拡大された。ウオッシュバン大学の研修も軌道に乗りつつあり、今後ウオッシュバン大学からの研修生の受け入れることで相互交流に向かって次の段階へステップアップしている。今後内容を充実するために国際交流委員会として、交流内容の見直し、新

しい交流の検討, 予算の獲得, 学生の恒常的活動, 教員のグローバル化などに力を入れ, 福岡大学グローバル化の波の先端に乗っていきたい.

引用文献

- 1) 文部科学省「国際交流政策懇談会最終報告書」平成 23 年 3 月. http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/23/04/_icsFiles/afieldfile/2011/04/21/1305175_01_4.pdf
- 2) 福岡大学: GAP 特集, 福岡大学学園通信 No.4: 9-10, April 2013.
- 3) 有田久美, 大城知子, 黒髪恵, 石橋曜子, 西村和美, 山下千波, 田中美加, 黒木求, 宮林郁子: 看護学科における国際交流活動の現状と課題 - 韓国啓明大学看護学部との国際交流 -, 福岡大学医学紀要第 40 巻第 3/4 号別冊: 219-226, 2013.
(平成 26. 10. 10 受付, 平成 26. 11. 13 受理)